



木内酒造株式会社
代表取締役社長

木内 敏之

大学を卒業し酒造業を継いだ頃、水戸市のウイスキーバー「アンバーハウス」の故滝島信臣さんに、敏ちゃんも日本酒だけでなく世界の酒を見聞した方がいいよと勧められ、滝島さん、水戸で酒販店営む飛田 史男さんなど総勢10名ほどで、スコットランドへのウイスキーの旅に出た。

当時は航空機の航続距離も短くロシア上空が飛行できずアラスカ・アンカレジ経由の16時間もの長旅。ロンドン到着、飛行機を乗り継ぎ、スコットランドへ。首都エジンバラからネス湖畔のインバネスまで蒸留所をめぐるハイランドトレイルである。最初の訪問は、高名なグラント一族の所有するグレンフィディック蒸留所。愛くるしいウイスキー猫と見事な庭園、そして巨大なウイスキー蒸留設備に圧倒されたのであった。それから各地を転々。ウイスキー工場のみならず、英国王室のウインザー城、そしてネス湖と続き、終了するころには、すっかりスコットランドの虜になってしまった。

念願のスコットランド再訪は、1999年6月。最初の旅は、とにかくスコットランドの楽しさを満喫したのであるが、今回は歴史の探訪と、さびれたスコットランドへの訪問であった。さびれたと表現したのは、英国のサッチャー政権下の抑圧

により、基幹産業であったウイスキーの販売が激減し、多くの蒸留所が閉鎖。そんな斜陽な業界を見ることが自分の置かれた日本酒業界の行く末を考える材料になるかと思ったのである。

旅のクライマックスは、スカイ島の訪問。

1746年最後の王子がフランス亡命しスコットランドの独立が終わったのであるが、その亡命の手引きをおこなった貴族フローラマクダネルと王子のロマンスの舞台が、スコットランド西部の人口数千の漁村スカイ島であった。今は、スカイブリッジにより本土より車で簡単に訪問できる島であるが、当時はスコットランド本土からイカダ状のボートに車を乗せて行くのであった。ボートがスカイ島に到着し、5分ほど車を走らせると、島最大のポートリーの町である。そのロイヤルホテルが、最後の王子のボニープリンスと、フローラが最後の夜を過ごした場所と言われるのである。そのホテルに泊まり、翌朝には、漁港の探検であり、まさしく日本と同じ漁港の姿であった。思えば、やんちゃだった中学の頃、生まれ育った那珂町は町営プールが一か所あるのみ。仲間たちと20キロメートルの距離を自転車で大洗に海水浴に行ったものである。そこで見た漁港の景色・潮の

略歴
1963年9月14日茨城生まれ。1986年上智大学理学部卒業、同年木内酒造合資会社入社。現在、株式会社木内酒造1823、木内酒造株式会社、株式会社木内の蔵の代表取締役社長を務める。
財団法人日本サッカー協会評議員。財団法人茨城県サッカー協会副会長。

香りを思い浮かべる漁港であった。もちろんスカイ島には、有名なウイスキー「タリスカ」がある。海の幸・潮風が薫るウイスキー、そして語られる歴史の人々。スカイ島は自分の中の世界で最も好きな街になったのである。

また、何か自分の可能性を信じて新たな事に挑戦しないと、いずれ家業の日本酒だけでは厳しい時代がやってくる。そうだ、いつかはウイスキーを自分でつくってみたい。そんな夢を抱いたのであった。

さて、話を大洗へと。

夢の中の大洗の海辺のレストランで。天然岩牡蠣には、バーボン樽で熟成させたバナナの風味のカスクストレンジス。焼き蛤には、甘み際立つラム樽熟成5年物。天然ヒラメの昆布締めには、米を使ったウイスキーのハイボールに、レモンを添えて。鮫鯨料理には、PXシェリー樽のストレート。最後は、大洗の新鮮いちごと、地元で焙煎されたコーヒーとウイスキーのホットカクテル。

ここには、漁港と豊かな海のめぐみがある。潮風を感じるウイスキーを造れる場所もある。語るべき偉人達もたくさんいる。まさしく自分にとってのスカイ島になってくれたら。

「スコット」から見たおおあらいでは、各界でご活躍の方々から大洗についてのご寄稿をいただきます。